令和８年度　学舎通信
令和８年１０月１日発行
For your SHOTO Vol.13
松濤学舎HP
公益財団法人 佐賀育英会 松濤学舎
文責　舎監　下村昌弘

Knowing から Doing へ　－基礎的・汎用的能力を身に付ける－

就活のための社会勉強会が終わりました。今年も多くの方々のキャリア遍歴に触れ、大いに刺激を受けたことでしょう。そんな中、最後に大坪信剛理事長が「英語をもっと話せるようになっていたかった」と語られたことが強く印象に残っています。実は私も全く同じ思いを抱いているからです。

高校時代の私は英語の教師を志していました。英語が最も得意な科目だったこと、そして担当の英語の先生を心から尊敬していたことが大きな理由です。その先生は大阪外国語大学でインド・パキスタン語を学ばれた方でした。私も英語教師になるのなら、まず別の言語を学んでみたいと考え、先生に相談した結果、中国語を選ぼうと考えていました。

ところが卒業間際、先生からいただいた言葉は意外なものでした。「International であるためには National でなければならない」。国際人を目指すなら、まず自国の言葉や文化をしっかり身につけなければならないという意味です。その言葉はその後、私の進路にも影響を与え、結果として私は国語の教師になりました。

近年は AI による翻訳技術が急速に進歩し、外国語を学ぶ必要性そのものを疑問視する声もあります。外国語大学にとっては逆風の時代とも言われています。しかし、本当にそうでしょうか。

国際基督教大学の竹内弘高理事長は、海外で活躍するためには依然として英語力が重要であると指摘しています。異なる文化や価値観を持つ人々と直接対話し、信頼関係を築くには、単なる翻訳以上の力が求められるからです。英語を通じて考え方や表現の違いに触れることは、自らの視野を広げ、対応力を柔軟にすることにもつながります。

もちろん、全ての人が海外を舞台に働くわけではありません。しかし日本にいても外国人と接する機会は増えています。留学でなくても、海外旅行でも構いません。大切なのは知識として知ることではなく、実際に体験することなのです。Knowing から Doing へ。その経験が将来どのような職に就くとしても、大きな財産になることは間違いありません。



松濤学舎では日曜の夜に英会話レッスンを行っています。これは自治会の希望によって実現したクラブ活動であり、主体は学生の皆さん自身です。教材を見ると、単なる英語学習ではなく、人間関係形成力や社会形成能力といった基礎的・汎用的な力を育む場であることが分かります。

企業が求めるコミュニケーション能力も、まさにそうした実践の中で身につくものです。一人でも多くの学生が主体的に参加し、厳しく自己を鍛えられる人であることを願っています。

若者よイヤホンを外して街に出よう　－雨の日は雨の音を聴きながら－

1970 年代、オーディオブームが到来し、我が家にも大きなコンポがやって来ました。当時のヘッドホンは聴力検査で使うような大型のもので、イヤホンは深夜放送をこっそり聴くためにトランジスタラジオにつなぐ程度の存在でした。80 年代になるとウォークマンが登場し、ヘッドホンはスタイリッシュになりましたが、イヤホンはまだ一般的とは言えませんでした。

時代は流れ、今ではワイヤレスイヤホンが当たり前になりました。初めて見たときは、耳から何かが垂れているのかと心配したほどです。最近ではイヤホンを着けたまま移動する人が多く、NTT の調査によると 15 歳から 24 歳の約半数が毎日利用し、そのうち２割は３時間以上使っている

※HP に「寮生活のひとコマ」と「舎監室の窓から」を随時更新掲載しています。（上記 QR コードからぜひ覗いてみてください。）

そうです。



便利な反面、私は少し気になることがあります。イヤホンをしていると周囲の音が聞こえにくくなり、知り合いに声をかけられても気付かないことがあります。寮や学校、職場などで呼びかけても反応がないと、声をかけた側は寂しさや疎外感を覚えるものです。また、イヤホンをつけてスマホに集中するあまり、混雑した電車で周囲への配慮が不足してしまう場面も見受けられます。

さらに、長時間大音量で音楽を聴くことは耳への負担にもなります。耳の中の有毛細胞は一度傷つくと回復しないと言われています。耳をふさぐことは単に音を遮断するだけでなく、自然や社会の気配を感じ取る機会を失うことにもつながるのではないでしょうか。

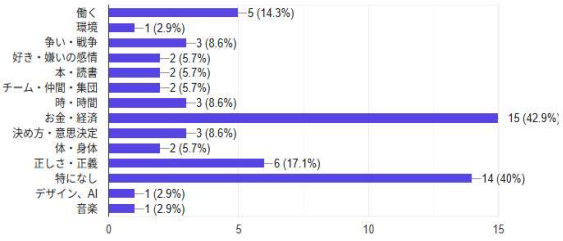
私たちは日々、さまざまな音を通して周囲の状況を理解し、人との関わりを深めています。鳥の声や風の音、誰かの話し声には、その場の空気や季節の移ろいが含まれています。自分の好きな音だけに囲まれていると、そうした豊かな感覚から遠ざかってしまうかもしれません。

たまにはイヤホンを外し、自分の呼吸や足元の感覚に意識を向けてみてください。雨の日なら雨音に耳を澄ませてみるのもいいでしょう。

今日も東京は雨模様。これから雨の音を聴きながらジョギングに出かけようと思います。

◎探究教室レポート◎

松濤学舎の学生と話をしていて「ずいぶんストレートに物を言うなあ」と感じることがある。例えば「将来金を稼ぎたい」「社会的なステータスを得たい」など。先日行ったアンケートでは「探究教室には意味がない」という酷評もあった。



開催の意図・設定テーマの趣旨がうまく伝えられなかったとスタッフ（私や KEI アドバンスの方）で深く反省した。

では「どんなテーマに興味があるか」に対する回答が左。

「お金・経済」「特になし」が突出している！

分析というより、単なる印象に過ぎないが、超現実的な欲望と自分以外のことには興味ありませんといったメッセージを感じた。

探究教室の２度目をすべきかどうか。英会話レッスンと合わせて学舎としてのクラブ活動の意義を考えていきたい。

月	日	曜	行事等
10	2	金	グローバルスポーツ共生シンポジウム（希望者）
10	4	日	前原町盆踊り大会（3日からテニスコート貸出）
10	4	日	英会話教室
10	8	木	企業説明会（昭栄化学工業）・自治会総会
10	11	日	英会話教室
10	18	日	東京佐賀県人会130周年記念会（11名参加）
10	25	日	前原町連合大運動会・英会話教室

① 学舎からの連絡はショートメールか、登録アドレスへのメールでしています。こまめに確認して「見ました」「いいね」のリアクションをお願いします。

② 共用エリアの消灯は22時です。それ以降は各自で静かに過ごし、規則正しい生活を送ってください。



【武蔵野の風】市ヶ谷の防衛省見学会に参加した。２０名ほどのツアーで、参加者の多くは大学生だった。見学先は旧大本営地下壕と市ヶ谷記念館。市ヶ谷記念館は東京裁判の法廷として使用され、三島由紀夫の事件の舞台としても知られている。▼これまで私が訪れた戦争遺構といえば、広島や長崎の原爆資料館、沖縄のひめゆりの塔などが中心だった。学生時代にはグアムの横井ケーブも訪れた。振り返れば、戦争の被害や苦難を伝える場所を通じて戦争を考える機会が多かったように思う。▼そのため今回の見学は極めて新鮮だった。ここは被害を伝える施設ではなく、当時の政策決定や軍事組織の中枢に関わる場所である。地下壕の構造や機能についての説明は事実に基づいたもので、感情的な評価よりも歴史的事実を知ることに重点が置かれていた。そこにこれまでとは異なる学びがあった。▼ところで、横井庄一さんは帰国時に「恥ずかしながら帰って参りました」と語った。一方、小野田寛郎さんは任務解除を受けて帰国したことで知られる。同じ帰還兵でありながら、その言葉や姿勢の違いには考えさせられるものがある。▼戦争の歴史は一面的ではない。被害の側面もあれば、当時の意思決定や組織運営の側面もある。さまざまな視点から歴史に向き合うことで、私たちは過去をより深く理解できる。▼過去を生きた人々の経験や選択の積み重ねの上に、今の社会があることだけは確かである。歴史に対する謙虚な姿勢を忘れずにいたい。機会があれば一度訪ねてみることをお勧めする。（弓口）

※HP に「寮生活のひとコマ」と「舎監室の窓から」を随時更新掲載しています。（上記 QR コードからぜひ覗いてみてください。）